

■**斎藤十一**　　週刊誌の嚆矢{週刊新潮}はじめ、戦後ジャーナリズムを主導、黒子に徹して、新潮社の“天皇”になった。

さいとうじゅういち

第一次大戦始1914＝　北海道忍路郡塩谷村で、武蔵国多摩の造り酒屋の出身で、東京ガスに勤め、北海道ガスへ出向していた斎藤清之助の長男に生まれ、紀元節にちなんで十一と名づけられる。姉1人がいた。

ロシア革命・1917＝　3歳：父が東京ガスへ復帰し、東京市大森区の恵まれた家に育ち、5人の兄弟が誕生。

大暴落・・・1920＝　6歳：尋常小学校に入学。痩せて喘息持ちであったことから、当時珍しいスイミングスクールに通われる。

原敬首相暗殺1921＝　7歳：

関東大震災・1923＝　**9歳**：

護憲三派圧勝1924＝10歳：4年生の時、たまたま、登下校中に聞こえてきたピアノの音に魅了され、音楽に目覚める。

金融恐慌・・・1927＝13歳：卒業し、名門私立の麻布中学に入学。成績は中位で、吃音に悩む、おとなしく目立たない生徒だったが、

海軍軍縮条約1930＝16歳：スイミングスクールの先輩の東大生の家、続いて銀座の名曲喫茶で、レコードを聴くのに熱中。

満州事変・・・1931＝17歳：卒業。他の生徒と同様、海軍兵学校を受験したが、体格検査で不合格。他の名門高校のいずれも不合格、技術者だった父の影響からか、早稲田第一高等学院の理科に入り、

五一五事件・1932＝**18歳**：早稲田大学理工学部へ進学するが、隣席となった学友が文学に熱中しているのに影響され、家の避暑地だった南房総の寺に滞在して、読書三昧。この間、妹が急逝し、娘を亡くして衝撃を受けた父が、次男(十一の弟)の受験失敗で進学することになった中野学校の経営母体{ひとのみち教団(PL教団の前身)}へ帰依、

国際連盟脱退1933＝19歳：父に連れ戻され、_{{ひとのみち教団}}に入団、**新潮社の創業者佐藤義亮とともに信者だったその四男哲夫と出会って親しくなると、義亮に見込まれ、孫の亮一**の家庭教師になり、

帝人疑獄事件1934＝20歳：**徴兵検査では肺浸潤が発見されて、兵役を免れるや、**

芥川直木賞始1935＝21歳：早大を中退して_新潮社に入社。倉庫係として、世の若者と無縁の状況に悶々としつつ、諸文学を読破、

二二六事件・1936＝22歳：_{{ひとのみち教団}}の女性信者小川富士枝と結婚直後、教祖の御木徳一が少女への強姦の疑いで逮捕され、

日中戦争始・1937＝23歳：_内務省の弾圧に、教団が解散に至るという事態に、もはや信じられるものは無いと観念したのか、出版統制が厳しくなっていくなか、_独自の作品判断基準を身につけて、頭角を現し、

日米開戦・・・1941＝**27歳**：佐藤義亮が倒れ、脳軟化症になる。***単行本の編集に携わりはじめ、著名な作家たちのもとに通い、**

年金+総武装　1944＝30歳：新潮社の文化企画部長に迎えられた_伊藤整、河盛好蔵、和辻哲郎とは長く親交していく。

敗戦・・・1945＝31歳：義亮が看板雑誌{新潮}を休刊後、敗戦となり、入社当時154人いた社員は5分の1の31人と激減、それも年配者ばかりで、さらに、戦前の{新潮}を支えた大編集長で“天皇”と呼ばれた中村武羅夫が退社。***復刊した{新潮}の編集長に抜擢されると、河盛好蔵を顧問に迎え、坂口安吾を発掘・起用する才覚を見せる一方、小林秀雄を頼り、鎌倉に日参して教えを乞い、トルストイとモーツァルトで、深く交友することになる。**

新憲法公布・1946＝32歳：GHQの追及に先手を打つように、義亮が長男義夫に社長を譲るとともに、経営陣を一新。**_取締役になると同時に{新潮}の発行人をも兼ね、著名な人気作家でも気に入らなければボツにして恐れられる一方、戦前傾倒していた保田重二郎が敗戦後、世の中から追放されると、原稿依頼の手紙を送って文壇復帰を促し、**

新憲法施行・1947＝33歳：戦前の{日の出}に代わる大衆雑誌{小説新潮}創刊。**_太宰治を励まし、{新潮}に「斜陽」を連載して大ブレイクさせるなど、自らの好みが新潮のスタイルとなって花開き、クラシックレコードを収集し、毎日のように高級プレイヤーで鑑賞、押しかけてくる政財界の人物の面会を断るうち、小林秀雄の影響で、芸術雑誌の創刊を思い立ち、印刷資材の枯渇で雑誌の休廃刊が続くなか、**

朝鮮戦争始・1950＝**36歳**：_{{芸術新潮}}を創刊、編集顧問に和辻哲郎を迎え、岡本太郎を発掘するなど、まさに自らの好みを体現、

独立回復・・・1951＝37歳：**小林秀雄「ゴッホの手紙」連載で評判。レコード店でクラシック音楽を聴いていた五味康祐に出会い、**

メーデー事件・1952＝38歳：**新潮社の社外校正員にして支援するも、作品は悉くボツにし、剣豪小説こそ向いているとけしかけ、**

テレビ放送始・1953＝39歳：ついに、五味康祐が{新潮}に「喪神」を発表して芥川賞となり、

国連加盟・・・1956＝42歳：徳間書店にアドバイスして{週刊アサヒ芸能}も創刊させる***副社長の佐藤亮一の発案により、出版界初の週刊誌{週刊新潮}を創刊すると、表紙に谷内六郎を起用し、五味の「柳生武芸帳」連載ばかりか、「吉田茂回顧録」をものすなどして大ヒット、新潮ジャーナリズムを世に知らしめ、ついに“天皇”と呼ばれるに至る。**

インスタントラーメン・1958＝44歳：この間、親しくなっていた部下の大田美和との結婚を決意、{国民タイムス}に、女性スキャンダルを報じられる。直木賞となった山崎豊子を用いて、{週刊新潮}に連載させ、国民的作家にしたばかりか、度々の盗作事件にも支え続ける。直接親交したのは、この山崎と、松本清張、瀬戸内寂聴に限られるほど、作家とは付き合わないため、一層怖れられる存在になる。

美智子妃・・・1959＝**45歳**：**早くも平均発行部数を90万台に乗せ、{週刊現代}{週刊文春}が創刊されたのをはじめ、この前後、{週刊女性}{女性自身}など、週刊誌の創刊ラッシュの火付け役になった。**

安保闘争・・・1960＝46歳：この年から{週刊新潮}に長期連載となった名物コラム「東京情報」の筆者オランダ人記者ヤン・デンマンが斎藤本人でないかと言われるが、実は、単に名づけ親で、編集部員の達者な書き手による持ち回りであった。この間、草柳大蔵、井上光晴により、{週刊新潮}の独特な記事スタイルが確立されて行く。

東京テレビック　1964＝50歳：糟糠の妻のその後の生活に十分配慮した上で、富士枝と離婚、

大学紛争始・1965＝51歳：{新潮}の、井伏鱒二の連載「姪の結婚」を「黒い雨」に変えさせたように、絶妙なタイトルのつけ方は、相変わらず社内全体から頼られる。**_部下の大田美和と再婚し、敬愛する小林秀雄の住む鎌倉に居を移す。**

美濃部都知事1967＝53歳：義夫が急逝し_家庭教師をして以来長く深く付き合ってきた**佐藤亮一が3代目社長に就任、**

震ヶ関ビル・1968＝**54歳**：札幌医科大学の和田寿郎による心臓移植を、唯一殺人事件として告発して、{週刊新潮}の地位を高め、この時の新潮社の取材を契機に、作家に転進した渡辺淳一は大流行作家になっていく。

日中国交回復1972＝58歳：「いよいよ大詰め“総裁選”金と権勢の亡者の大見世物」と題した記事も政界を揺らす。

石油ショック1973＝59歳：

・・・1981＝67歳：専務取締役就任。***自らの企画で写真週刊誌{フォーカス}創刊し、**

中曽根内閣・1982＝68歳：**_法廷での田中角栄の写真をスクープして、発行部数を一気に数倍にし、**

・・・1984＝70歳：**_1月6日号は200万部を超え、週刊誌史上最高記録を達成するが、追隨するように、講談社が{フライデー}を創刊すると、ほとんど誌面に口を出さなくなり、**

ジャンボ機墜落1985＝71歳：{週刊新潮}の「気をつける“佐川君”が歩いている」も記憶に残る名タイトル。3年前に他の幹部が創刊するも不調で**_廃刊寸前になっていた健康雑誌{新潮45+}を全面的に刷新、{新潮45}を創刊すると売上を伸ばす。**

バブル始・・・1986＝**72歳**：文藝春秋や小学館に続いて**_光文社が{フラッシュ}を創刊して、写真誌ブームとなった。**

昭和天皇没・1989＝75歳：取締役相談役に就任。ピートたけしをインタビュー記事等で起用、「衆愚とはオレのことかとたけし言い」などの名タイトルが連発され、本人に会うことは無いにもかかわらず、長期に続くことになる。

バブル崩壊　1992＝78歳：相談役に退いたにもかかわらず、

オウム事件　1995＝**81歳**：

・・・1996＝82歳：**_佐藤隆信が4代目社長に就任した年になってもなお、役員会を取り仕切って、新潮社の天皇であったが、{フォーカス}の発行部数が落ち込んでいくなか、TBS「ブロードキャスター」のインタビューに応じ、生涯初めてテレビ出演、テレビ放映された自らの姿を見て「老醜だな、もう死ぬべきだ」とつぶやき、翌朝ソファに座ったまま脳梗塞に倒れ、***謎の天才編集者のまま、没した。****

鎌倉の建長寺の告別式では、モーツァルトの「フリーメーソンのための葬送曲」が流れ、墓石は、遺言どおり、自宅の漬物石が用いられた。前妻との間に迎えた養子小川雄二がおり、離婚後も支援して音楽家になっていたことなど、知られざる顔のあったことが判明していく。

森功「鬼才　伝説の編集人　斎藤十一」、